

音楽の散歩道 その5の2

— ジャズは世につれ —

梶吉敏子と私の世代のジャズ

| 鹿児島市 |
 | 東区・荒田支部 |
 | 大海クリニック・大海宮崎クリニック |
 | 加治木温泉病院 |

栗 博志
 栗 隆志
**大西 浩之・海江田 寛
 夏越 祥次**

はじめに

新年明けまして御目出度うございます。

先日、テレビのチャンネルを操作していると、梶吉敏子さんの日本での活動が、放映されているのを、たまたま観る事ができた。

わずか10分間位だったので、いつの時期の映像かは不明であったが、彼女のキャリア

は立派だなと思った。

そして、1枚の彼女の古いサイン入りLPの事が頭に浮かんだ。

LPは、1976年製作のものなので、今から丁度50年前のものとなる。

そこで、今回はこのLPを主に書き始めてみようと思う（図18）。

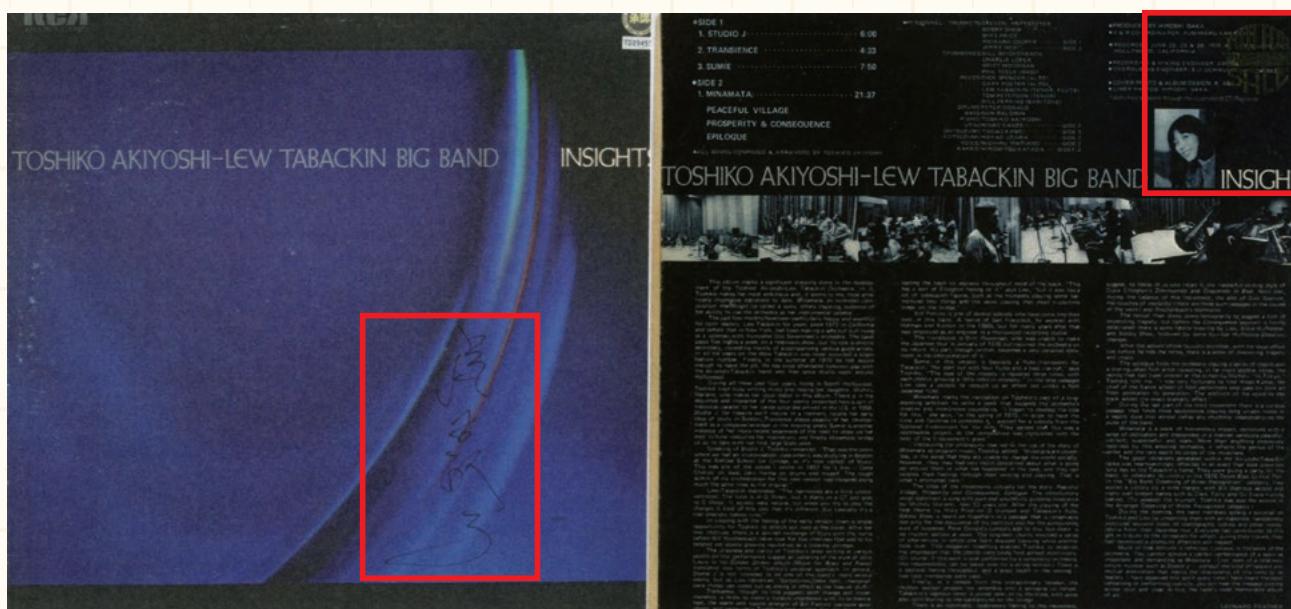


図18 梶吉敏子の代表的LP、「INSIGHTS, 1976」のジャケット
 左：表面、右下に大きいサインがあるが、よく見えない、残念！（赤の四角内）
 右：裏面、右上に「NOT FOR SALE, DEMONSTRATION」（赤の四角内）

今回は、2023年11月の本誌（「ジャズは世につれ、アメリカの歴史とジャズ」）の続編となるので、図は通し番号とした。2年ぶりである。

私達の世代はジャズで育った最後の世代で

あろうし、私達の先輩方にはマニアックの方で、膨大なLPを所有している方も多い。

私などは、ごく普通的一般的な愛好家であるので、身の丈に合った、イージー・リスニングのジャズの話を、書こうと思う。

(7) 穂吉敏子と50年前の彼女のLP

以下、いつも通り敬称は略。

穂吉は、1929年生まれであるから、間もなく100歳という高齢である。

戦後、大連から両親の故郷である大分県に引き揚げて、別府の米駐留軍キャンプの「つるみダンス・ホール」で、ジャズ・ピアニストとしての活動を開始したという。

別府市の郊外の高台に自衛隊駐屯地があるので、多分そこが以前の米軍キャンプだったのだろう。実家から車で10分足らずの所なので、彼女が別府に居たと言う事が、私にとって懐かしく、何となく親しみを感じる。

彼女は53年に、ノーマン・グランツの率いる「Jazz At The Pilharmonic」の楽団員だったオスカー・ピーターソンに見出され、54年には、「トシコズ・ピアノ」というタイトルの初レコードを、リリースしたとの事であるから、才能もあったのだろう。

56年、26歳で渡米し、奨学生として、バークリー音楽院で学んだ。

69年、フルートとテナーサックス奏者、ルー・タバキンと結婚し、73年には、ビッグ・バンドを結成した（バンド名には穂吉の名前が先である事から、穂吉の実力が窺われるし、タバキンも米国的で偉いと思う。日本では、男性名が先だろう）。

74年には、ジャズと日本古来の和楽器を使用した「孤軍」を発表した。

私は、この曲を聴いた事はないし、74年なら、私の学生時代で、さほど昔の話でもないな、とも思う。

私の手元の「INSIGHTS」は、録音が、1976年6月、ハリウッド、Ca.とあるから、丁度50年前の話である事は既に述べた。

この「INSIGHTS（洞察力、見識）」の

1面には、「STUDIO J（Jスタジオ）」、「TRANSIENCE（はかなさ、儂さ）」、「SUMIE（墨絵）」の3つの小曲が演奏されており、2面は、「MINAMATA（水俣）」である。

「Jスタジオ」は、バークリーの即興演奏教室の名称と解説文に書いている。他の2曲は、日本古来の心象意識を音楽で表現したと思われる。

2面の「MINAMATA」は、「謡（能）」を取り込んで、日本の社会問題を、音楽で昇華させようと試みたものであろう。

私のような音楽好きの一人にすぎない若輩者が、日本を代表するジャズの大家に、物申す事は何も無いが、「あと一息、このアルバムに工夫を凝らせば、グラミー賞を取れたのに…」と思い、その要点を分析してみたのだが、去年、この他に計8点のLPが、日本のレコード会社により復刻・再販された事を知り、書いていたものを破棄した。

そうであればまだチャンスはあるので、今後を見守りたいと思う。

今回の復刻盤のジャケット等は、できるだけオリジナルに近いものにしたという。

（ここからは、おまけ）

なるほど、一寸目には、私の手元にある、50年前のオリジナル盤と見分けがつかない。然し、大丈夫。LPに慣れた目で見れば簡単に見分けがつく。

まずレコード盤を手に取ってみれば、重量で時代が推定できるし、盤自体の円形の説明文には、2mm位の字で「MADE IN U.S.A. ① 1978 RCA RECORDS」と文字がある。

又、レコードを入れている紙の経年変化で古いレコード袋を、一見すればすぐ分かる。

ジャケットの裏面の一番下には、2.5mm位の文字で「© 1978 RCA Records.NY · Printed in USA」と記載されているので、ここでも判別できる（文字が非常に小さい）。

以前は、LPを個人輸入すると、郵便局で包装は破られ、中身が厳しくチェックされ、商売用でないか？、と大変だった。

多分関税などが、問題だったのだろう。

私の手元のLPは、特別な盤なので、更に復刻盤とは異なるだろう。このLPは私の推察では、本誌先月号の「グルミュオー」と同様、演奏者・穂吉の取り分であろう。

ジャケット裏面の右上に、金色の「NOT FOR SALE, DEMONSTRATION」と押字されている（図19）。

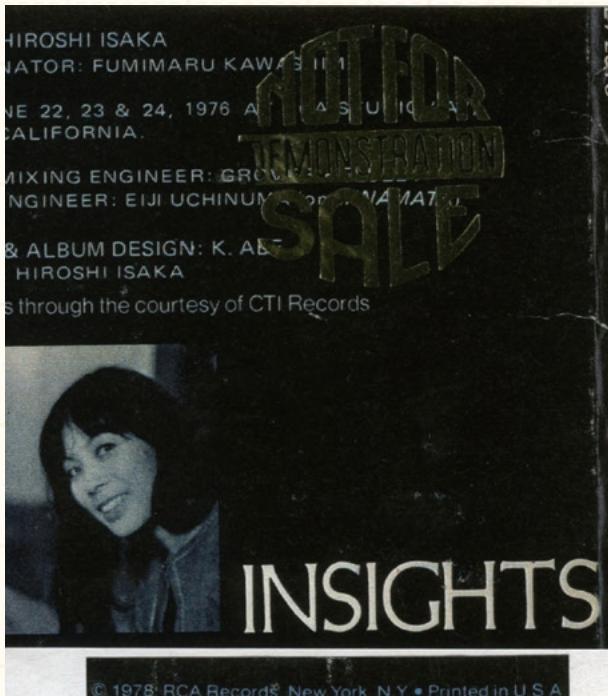


図19 LP裏面、右上の拡大
「NOT FOR SALE」と金色で押字。
演奏者の取り分のLPと思われる。
下には「©1978 RCA Records」

ただ残念なのは、ジャケット表面の濃い青色の画面に、黒マジックで書かれた穂吉のサインが、鮮明には判別できない事である（通常のコピーでは、全く識別不能）。

然し、彼女のサイン入りLPで、彼女の演奏を聞く事ができるのは楽しい。

〔8〕グラミー賞

私は、コンクールと音楽賞には、あまり好

感は持っていない。

ただ穂吉は、日本人として最初にアメリカに渡り、学び、米国に定住し、第一線で活動してきたジャズ音楽家であるので、1回はグラミー賞を取ってほしい、との願いは日本人のジャズ愛好家全ての思いであろう。

私は、グラミー賞の事は全く知らないが、新人を含め、だれにもチャンスがあり、一発屋的作品（その年に注目された作品）が受賞するのは、公平だろうし、逆に、その世界で永年に亘り貢献したり、高名だからといって受賞するものでもない事も又、当然だろう。

でも私は、穂吉には後者での受賞を期待したい。何しろ、日本は未だジャズの大消費地なのだから。

グラミー賞の個人の受賞回数は？と言うと、クラシック音楽では（正確な事はよく知らないが）、指揮者では、ショルティ・31回、ブーレーズ・26回、バーンスタイン・16回、小澤・1回に対し、何とカラヤン・1回（0回？）なのである。

ちなみに、ピアニストのホロヴィッツは、想像通り、25回と多く、アメリカでの人気の高さを示している。

ショルティ、ブーレーズは人気、実力を兼ね備えており、受賞数が多いのは当然であるし、バーンスタインは、ショー・ビジネスの世界でも、知名度が高いので、16回は妥当な数字だろう。

小澤の受賞も立派である。こう言っては失礼かもしれないが、以外な人も含め他に数名の日本人も受賞している。日本人の視点とは異なる権威に捕われない、この賞の特性を示唆している。

だが日本人の感覚としては、カラヤンの1回（0回）は、理解困難な事だろう。

ただ言える事は、日本人が接する海外の演奏家は、非常に限られた人達で、演奏会など

の興業主の宣伝担当者、テレビなどの製作担当者、それに評論家などの、ごく限られた情報しか、耳にしないし、それが全てだと思っている人が多いからかもしれない。

お国柄も、もちろんあるだろう。

さてジャズに於いては、マイルス・ディヴィスの8回に対して、ジャズ、ブルース、ゴスペル、ソウル、ロック更には、映画音楽、クラシック音楽などとクロスオーヴァー、あるいはフュージョンした音楽の、レイ・チャールズ18回、スティーヴィー・ワンダー・25回、クインシー・ジョーンズ・28回と、圧倒的に多い。

とにかく、グラミー賞は、人気のバロメーターと言えよう。

もちろんマイルスは、グラミー賞など全く気にしていなかっただろうが。

ジャズも、時代の波に逆らう事はできない。

様々な事が頭に浮かぶが、1956年に単身アメリカに飛び込んだ穂吉には、グラミー賞を取って欲しいという思いは弥増す。

〔9〕私達の時代のジャズ

私達が学生の頃には、アメリカの多数のジャズ専門のレコード会社の、1930年代からのジャズの名盤が、各々シリーズ化されて、何百枚も復刻、リリースされた。

私は天文館の十字屋、古川楽器店の他、騎射場にあった、騎射場レコードでも、若干のレコードを購入した。

レコードを入れるビニール袋に、それらのレコード店名を見つけたり、マジックで書かれた購入日を見ると懐かしくなってくる。

あれも欲しい、これも聴きたい、と思いながら、レコード店でレコードのジャケットを順に眺めながら、溜め息をつきながら、現実的には、充実したNHK・FMを聴くのが常であった。

やはり、LPは高価だった。

バイトでもして稼げばよいのだろうが、部活が忙しくて殆ど時間は無かった。

当時は、「釣り同好会」と、社会人と学生の「フェロー・コラス」それに「舞踏研究会」に入っていたが、特に舞踏研究会は、授業が終わった3時過ぎ頃から、学生会館のフロアの床みがき、うさぎ飛び、校庭のランニングに始まり、歩く練習（シャドウ・ウォーク）などに始まり、下宿に帰るのは、9時頃でとにかく厳しく、忙しかった。

ムーンライト・セレナーデの曲に乗って、ホールドをとりながら、前後に歩く事ですら如何に難しいか、何事もやってみないと分からないと、気付いたのも、此の頃であった。

図20は、「JAZZ LIBRARY 1500シリーズ」のアート・ファーマーのLPである。

図21は、「CTI・オリジナル 1500シリーズ」のジム・ホール。

図22は、「ヴィー・ジェイ・マスターピース・シリーズ」のウィントン・ケリー。

その他の多くのシリーズの他、単発でも、ジョニー・スミス（図23）やアンドレ・プレヴィンまで、モダン・ジャズとして、レコードがリリースされた（図24）。

先に述べた小さい「騎射場レコード」でもジャズLPが溢れ、店内には活気があった。

女性歌手も「キャピトル」系のダイナ・ショア（図25）、ジューン・クリスティ（図26）、キャピトル系、デッカのペギー・リー（図27）、「ヴァーヴ」のアニタ・オディ（図28）他、ベヴァリー・ケリー（図29）、クリス・コナーなど目白押しで、ジャケ画を見るだけでも、楽しかった（図30）。

また、2枚組のベスト盤も多数出回り、1組で演奏家の全貌が把握できるので、大変有り難かった。

図31は、「スポットライト・シリーズ」のサラ・ヴォーンのベスト盤である。

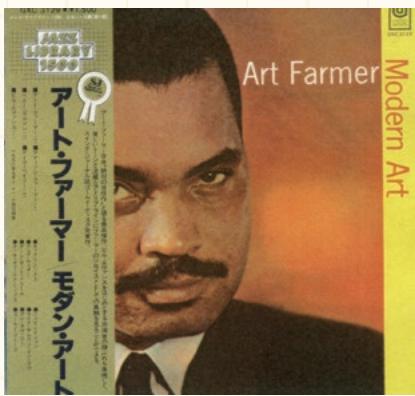


図20 アート・ファーマー, トランペット



図21 ジム・ホール, ギター

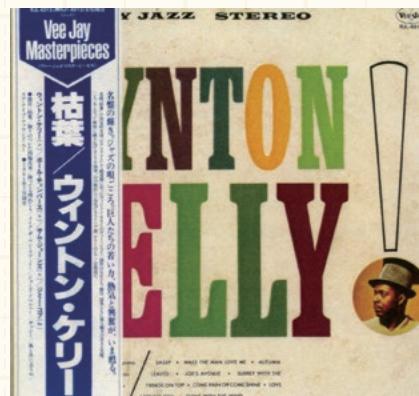


図22 ウィントン・ケリー, ピアノ



図23 ジョニー・スミス, ギター



図24 アンドレ・プレヴィン, ピアノ



図25 ダイナ・ショア, ヴォーカル



図26 ジューン・クリスティ, ヴォーカル



図27 ペギー・リー, ヴォーカル



図28 アニタ・オデイ, ヴォーカル



図29 ベヴァリー・ケリー, ヴォーカル

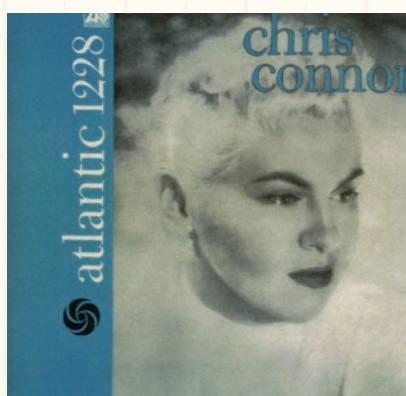


図30 クリス・コナー, ヴォーカル

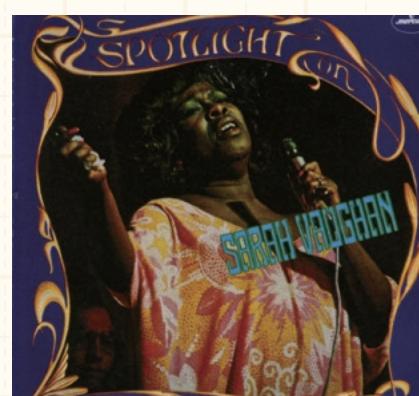


図31 サラ・ヴォーン, ヴォーカル

女性歌手は、花盛りであったが、男性のジャズ歌手は、ルイ・アームストロング以外、正直に言って誰も思い浮かばない。

とある解説文によると、ナット・キング・コール、アームストロング、シナトラ、レイ・チャールズなどが、代表的な男性ジャズ歌手とあり、以下、多数の名が挙がっていたが、大部分、私の知らない人達だった（図32）。

更にアームストロング以外の3人の歌手を私は、ジャズ歌手とは認識していなかった。

シナトラやキング・コールなどは、私にとっては、ポピュラー・シンガーの一人であった（図33）。

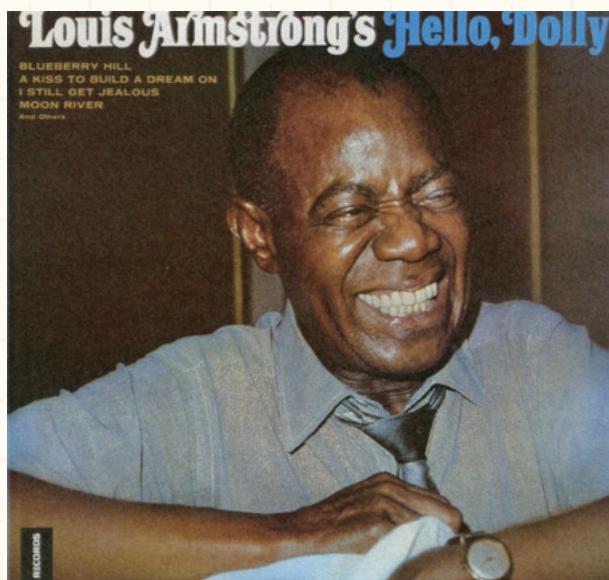


図32 ルイ・アームストロング、ここではヴォーカル



図33 ナット・キング・コール、ヴォーカル

もちろん評論家や、研究者は細分化して、系統化するのが生業であるので、彼らをジャズ歌手に含めるのが当然かもしれない。

音楽を聴く者にとって、「ジャズ」という単語の意味するものが、60年代になってから、各人、千差万別なものとなっているのだろうと、素人ながら考えている。

全てが多様化した時代に、1つのジャンルに閉じ込めるのは、不可能だろう。

然し、歌手の経歴を紹介する場合などには、ジャンル分けは、簡便、有用とも思う。

1970年代に入ると、デオダートがクロス・オーヴァーの斬新な音でクラシックの「ツアラトゥストラはかく語りき」や「亡き王女のためのパヴァーヌ」を演奏するなど、ジャズは、着実に耳障りの無い、イージー・リスニングの時代になった。

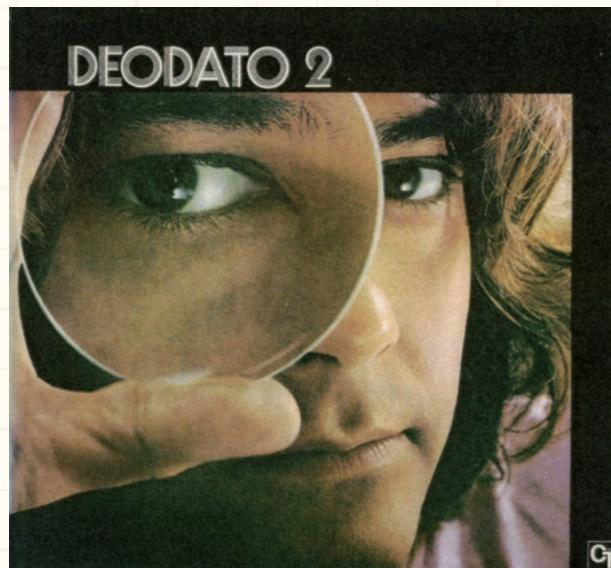


図34 デオダート、キーボード

もちろん、1960年代のフランスのジャック・ルーシエ・トリオの「プレイ・バッハ」シリーズを始め、同様に、バッハ、リスト、ショパンなどのクラシック音楽や、スタンダード・ナンバーを、ジャズに編曲した、オイゲン・キケロ・トリオなど、ジャズのポピュラー化は、一層推進された（図35）。

更にジャズ・コーラスの「ア・カペラ」グループ、シンガーズ・アンリミティッドも、同様の曲のア・カペラ演奏で人気を博した(図36)。

オイゲン・キケロとシンガーズ・アンリミティッドは、共同して作品を作ってい



図35 オイゲン・キケロ、ピアノ



図37 オイゲン・キケロとシンガーズ・アンリミティッド

る(図37)。

1971年には、レイ・チャールズが、「ショー・ビジネス、25周年」の記念アルバムをリリースした。アルバムもジャズやソウルのコンサートではなく、「ショー・ビジネス」とある所に、時代の変遷を感じる(図38)。



図36 シンガーズ・アンリミティッド、ア・カペラ

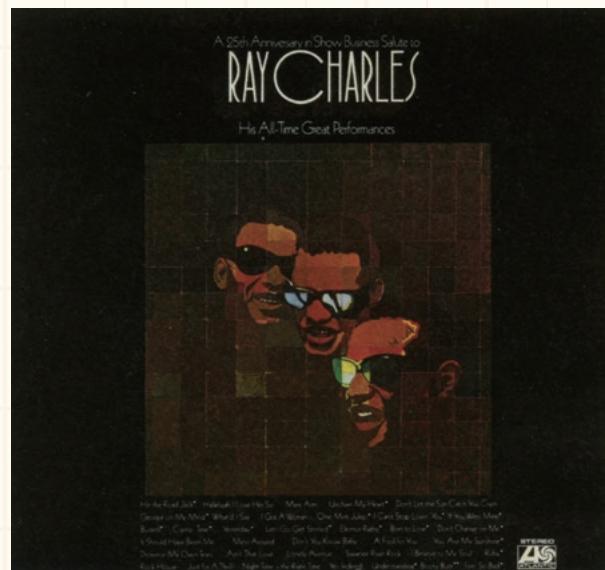


図38 レイ・チャールズ、「ショー・ビジネス、25周年」

1978年には、ベニー・グッドマンが「ライブ・アット・カーネギー・ホール、40周年記念コンサート」をリリースした。往年の演奏者は、ベニーとライオネル・ハンプトン、歌手のマーサー・ティルソンのわずか3人だったと言う（図39）。



図39 ベニー・グッドマン、「ライブ・アット・カーネギー・ホール 40周年記念コンサート」

1974年には、MJQ（ザ・モダン・ジャズ・カルテット）の「ラスト・コンサート」が行われた（図40）。



図40 MJQ、「ラスト・コンサート」

更に現実の問題として、トム・ジョーンズの歌うサム&デイヴの「ホールド・オン」、

R&Bのジェームズ・ブラウンの「マンズ・マンズ・ワールド」、スティービー・ワンダーの「アイ・ワズ・メイド・トゥー・ラヴ・ハー」などを聴いても、ポピュラー歌手のトムと他の歌手の歌唱に差はほぼない（図41）。



図41 トム・ジョーンズ

これらも、ポピュラー化の事例である。

もちろん、オスカー・ピーターソンのヴォーカルやピアノも、イージー・リスニング音楽と言っても、特に違和感はない（図42、43）。（以上、全て私見です）



図42 オスカー・ピーターソン、ヴォーカル

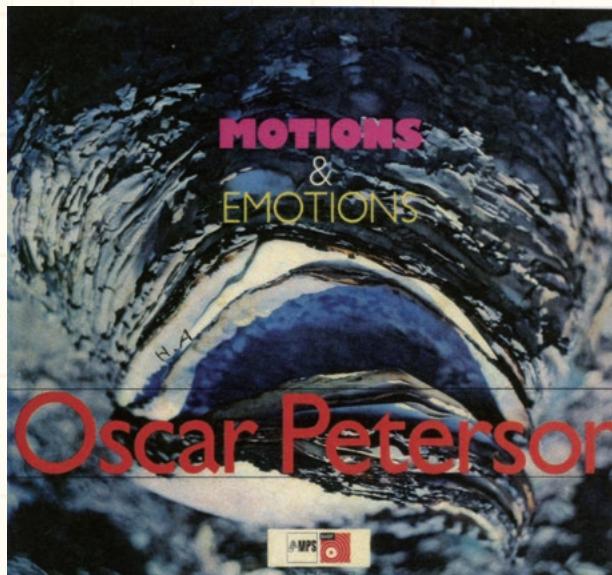


図43 オスカーピーターソン、ピアノ

最後にひばりのCDを紹介しよう。



図44 美空ひばり、ヴォーカル、若い！

ひばりが、アメリカのスタンダードを歌えばポップス、ジャズ曲を歌えばジャズ、イタリアの曲を歌えばカンツォーネ、フランスの歌ではシャンソンになるのである（図44）。

[10] 私のジャズの貴重盤LP

私の貴重盤と言えば、やはり演奏者のサイン入りLPである。

以前には、カウント・ベイシーなど大分持っていたが、あげてしまった。

ここでは、懐かしい演奏家を紹介する。

まず最初の2人の名を知る人はいないだろうが、重要人物なので挙げておく。

(1) テッド・ルイス (1890-1971)

彼は、子供の頃のベニー・グッドマン憧れのクラリネット奏者、バンドリーダー。

彼は、南部のディキシー・ランド・ジャズをコピー演奏した、北部の最初期のエンターテインメントのスターである（図45）。

1920年代には、ポール・ホワイトマンに次ぐ人気を博し、ジミー・ドーシーにも影響を与えた。図は60年のサイン。

アルバム・タイトルの「ME AND MY SHADOW」は、孤独な自分と二人ぼっちの自分の影を歌った、1929年のビリー・ローズ作詞の名曲で、シナトラなど、多くの歌手達がカヴァーしている。

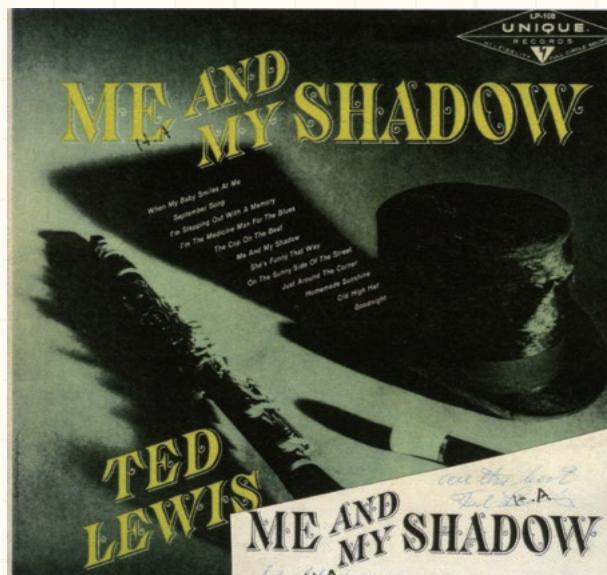


図45 テッド・ルイス、クラリネット

(2) ボビー・ショート (1924-2005)

ボビーは、NYの高名な「カフェ・カーライル」（ザ・カーライル・ア・ローズウッド・ホテル）で長年演奏した、ギャバレーのシンガー、ピアニスト、バンドリーダーである。ここでは、ジョージ・シアリングらも出演し

ている。このホテルは、シナトラ、モンロー、ダイアナ妃、マイケルなどが顧客であった事でも知られる（図46）。

ジャズは一部を除き、ショー・ビジネス、エンターテインメントとして発展してきた。



図46 ボビー・ショート、シンガー&ピアニスト

(3) ベニー・グッドマン (1906-1986)

クラリネット奏者でバンドリーダー。

ベニーに関しては、既に一度述べた。

スイング・ジャズを推進し「スイングの王」と呼ばれた。彼のバンドはビッグ・バンド構成であったが、30年代のトリオでは、アフリカン・アメリカンのテディ・ウィルソンを、カルテットでは、ライオネル・ハンプトンを雇った。

当時は人種差別の激しい時代で、死の危険をも顧みない行為であった。

彼は、人種差別の壁を破った、偉大な音楽家であった（図47）。

学校、バス、公衆トイレ、ホテル、レストランなど社会的偏見、差別の強い時代に、見下されていたジャズ・バンドを率いて、クラシックの殿堂・カーネギー・ホールでジャズ・コンサートを開く事ができたのも、一重に彼の偉しさの賜物であり、それ故、

彼はジャズを社会的に、クラシックのレベルに押し上げたと言われる。

以前に述べたが、偉大な女性歌手、マリアン・アンダーソンが、ワシントンDCの「コンステイテューション・ホールでの公演使用を拒否されたのは、1939年の事で、彼女がアフリカン・アメリカンとして、始めてメトロポリタン歌劇場の舞台に立ったのは、1955年の事である。

現代とは全く時代背景が異なるのである。

一言付け加えると、カーネギー・ホールは基本、賃貸ホールで、料金さえ払えば制約なしにだれでも演奏会を開ける。

大、中、小の3つのホールがあり、小（定員268）では、ピアノ・レンタル、照明等を含め、皆様方（読者の方々）でも、簡単に支払える金額である。



図47 ベニー・グッドマン、クラリネット

大ホールでも、日本で名の売れたアーティストなら、多分ポケット・マネーで支払える額だろう。

ただ客が入るか否か、客が日本人だけであるか、などの問題点はあるが。

私が中学生の頃、「硝子のジョニー」がヒットしたアイ・ジョージが、日本人として始めて、カーネギーでコンサートを行った事が話

題になった（1963）。彼は又、入れ歯がダイヤと言う事でも有名であった記憶がある。

歴史的大演奏家達のカーネギー・ホール演奏会と、一般演奏家の演奏会とは、全く意味合いが違う事に注意しなければならない。

以下は、アトランダムに簡単に紹介する。

(4) ケイ・スター（1922-2016）

彼女は16歳の時、グレン・ミラー楽団で初レコードをリリース。

ベギー・リーらのキャピトルやRCAビクターに所属し、1940-50年代に活躍した歌手で、パット・ブーンや、トニー・ベネットとともに共演した。

このLP「ムーヴィン」は、1959年にリリースされた（図48）。



図48 ケイ・スター、ヴォーカル

(5) スタン・ケントン（1911-1979）

彼はウディ・ハーマンと共に、ウェスト・コースト・ジャズの潮流を作ったピアニスト、バンドリーダーである（図49）。

彼は、自分のスタイルを「プログレッシブ・ジャズ」と呼び、楽団員として（時期は異な

るが）、スタン・ゲッツ、アート・ペッパー、アニタ・オデイ、ジューン・クリスティ、クリス・コナーなどを擁した。



図49 スタン・ケントン、ピアノ

(6) アニタ・オデイ（1919-2006）

彼女は、ジーン・クルーパ、スタン・ケントンのバンドなどで活躍した歌手で、ハスキーボイスの独特的な歌唱が特徴で、人気を博した。

1945年のダウン・ビート誌の「ベスト・女性バンド・ヴォーカリスト」に選ばれた。

彼女は、1963、78、81年に来日したが、68年の来日時には、「アニタ・オデイ・イン東京'63」のアルバムが作られた。

ここに提示するアルバムは、「アニタ・オデイ・イン東京」で、1978年製作であり、サインも78年のものである（図50）。

(7) ジョージ・シアリング（1919-2011）

とメル・トーメ（1925-1999）

ジョージは、生後まもなく失明、3歳よりピアノを始めた。

「クール・ジャズ」を代表するピアニストであり、且つ「バードランドの子守唄」など、

スタンダードとなった曲なども作曲した。メルは、シナトラと並ぶ、「ジャズ界の巨人」とも言われるジャズ歌手（図51）。



図50 アニタ・オデイ、「イン東京」

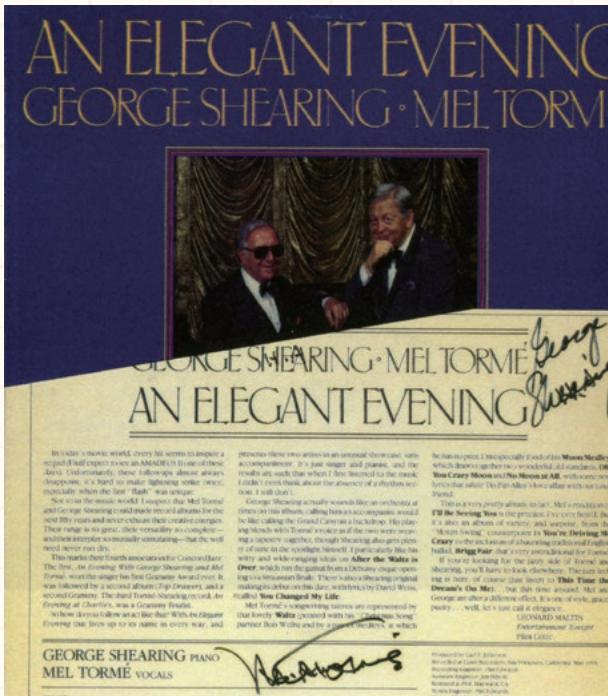


図51 ジョージ・シアリングとメル・トーメ

(8) ソニー・ロリンズ (1936-)

彼はハード・バップのサックス奏者で、マイルス・ディヴィスやチャーリー・パーカーなど、ジャズ界の多くの代表的奏者と共に演している（図52）。

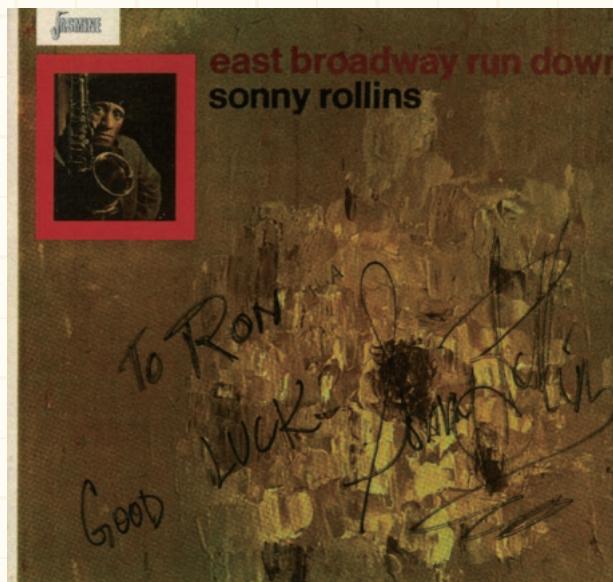


図52 ソニー・ロリンズ、サキソフォン

(9) アート・ファーマー (1828-1999)

彼は、ライオネル・ハンプトン楽団で活動後、クリフォード・ブラウンなど多くの演奏家達と共に演した、トランペット、フリューゲル・ホーンの演奏家である（図53）。

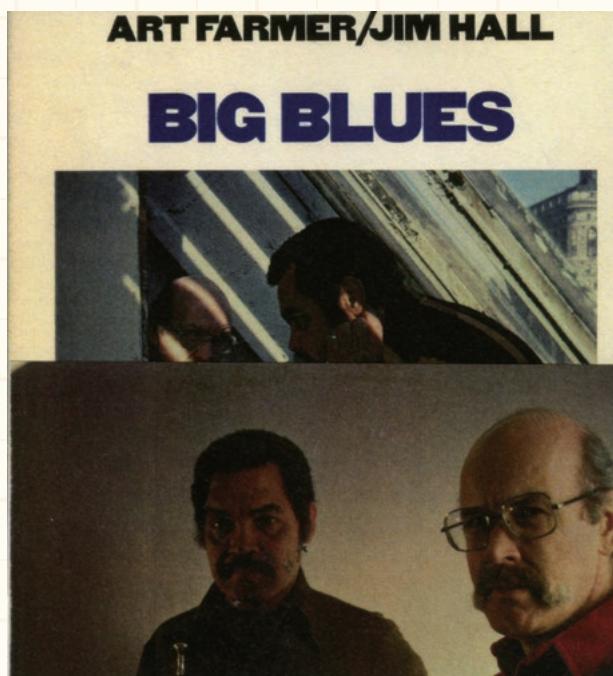


図53 アート・ファーマー、トランペット

(10) スタン・ゲット (1927-1991)

彼は、トニー・ドーシー、ベニー・グッドマン、ウディ・ハーマン楽団等で活動し、「クー

ル・ジャズ」を代表する、テナー・サックス奏者となる（図54）。

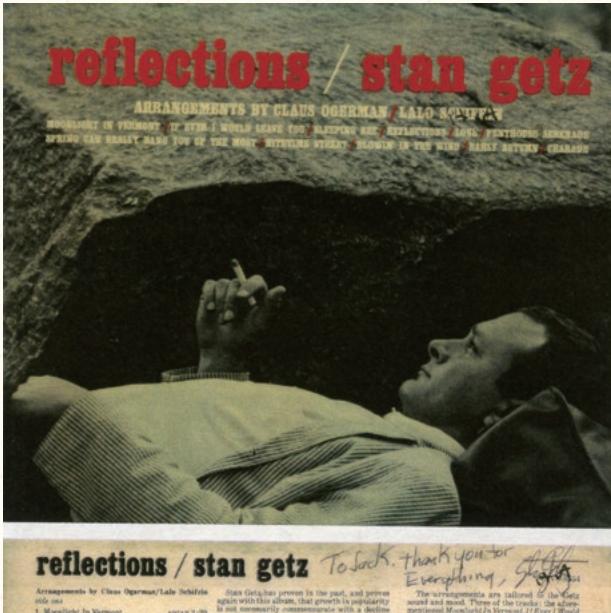


図54 スタン・ゲツ, サキソフォン

ジャズにボサノヴァを取り入れたアルバムを作ったり、アントニオ・カルロス・ジョビン、アストラッド・ジルベルトらと共演した。

(11) エラ・フィッツジェラルド(1917-1996)

彼女は、女性ジャズ・シンガーを代表する人物の一人である（既述、図55）。



図55 エラ・フィッツジェラルド, ヴォーカル

私はLPを聴くのが好きだが、もちろんCDもよく聞く。CDは安価で容易に入手できる点が利点だった（図56）。

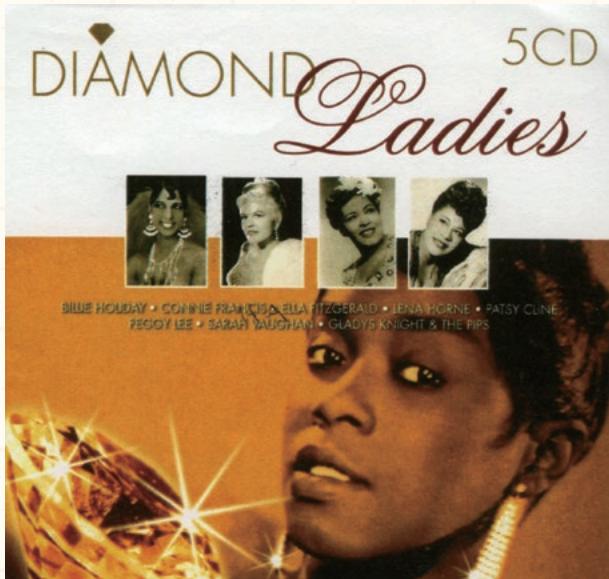


図56 「ジャズの歌姫達」

図56のCD5枚組も、ビリー・ホリディ、フィット・ジェラルド、ベシー・スミス、カーメン・マクレイ、サラ・ヴォーンなど、代表的歌手、20名位の歌唱を聴く事ができる。

ただレコード店が街から次々と姿を消していく。外出時にフラッと立ち寄り、掘り出し物を見つける楽しみが無くなり寂しい。

（つづく）

改めまして

新年明けまして御目出度うございます。

本年が、鹿児島市医師会員、市医師会事務局他、市医師会関係の皆様方、並びにその御家族様の御健勝と御多幸を祈念致します。

私としては今後共、現在・過去の文章に囚われる事なく、自分の経験に基づき、自分なりに咀嚼し、自分なりに構想し、自分の意見を盛り込んだ、医師にしか書けないオリジナルな文章を目指し、書き続けたいと思います。